海と田んぼからの復興プロジェクト
第７回会議　議事録

【日時】2012 年 4 月 15 日 13 時半～18 時

【参加者】

中静(東北大)、河田(東北大)、占部(東北大)、竹本(東北大 GCOE)、菊池(東北大)、岩渕(翼)(東北大)、牧野（東北大)、新妻（東北大)、国吉（東北大)、向井（東北大)、千葉（東北学院大学)、久米（キヤノン)、蓑原（国連大学)、鈴木（国連大学)、大和田（LBA)、佐藤（CEPA)、吉田（筑波大学)、上原（ランドブレイン)、鳥居（環境省)、岩渕(NPO 法人田んぼ)、三嶋（東北サイコウ BANK)、藤田(日経 BP)、川廷(CEPA JAPAN)、服部(サステナブル・ソリューションズ)、瀧川（NPO 法人田んぼ)、前山(NTT データ経営研究所)(記)　（敬称略）

【議論内容】

1. 浦戸諸島「里島・里海グリーン復興プロジェクト」浦戸フィールドミュージアム構想（河田）
   - 目的：浦戸各島での自然、文化、歴史などの発掘、整備
     - 自然：これまでの自然調査の活用
     - 文化・歴史：昔の浦戸諸島の生活様式をヒアリング
   - 自然環境、農地、漁場の再生
     - 地域に生息する植物を利用した自然再生
     - 高橋先生が野々島で白菜の栽培（島ごとに適した品種の栽培を進める）
     - 干潟の外来種排除によるあさりなどの復活
     - 仙台白菜の栽培や大豆の栽培など
       ※ただし、白菜は肥料を多く使うため、環境面でよいのか見当
     - 牡蠣のブランディングをして販売、アピールする（浦戸でしか食べられない、など）
   - エコツーリズム・観光
     - 少人数の体験型エコツーリズム企画として、小規模でも持続的に、島の規模にあったものを企画する
     - 海を活用したイベントの企画（桂島で畑中みゆき氏が検討中）
   - 環境教育・人材育成
     - 現地の小学校等と連携した環境教育の実施を検討
   - 在来種植栽計画
     - 桂島、野々島、寒風沢島にて計画中
   - 干潟における外来種駆除（サキグロタマツメタ）による潮干狩りの復活
     - 駆除が継続的に続くよう、サキグロタマツメタを食べる方法の案出しをする必要がある
     - NPO 法人田んぼでは、田んぼの草を食べる（「自然丸ごと」食べる）ことを検討している（健康にも良い、うまく料理すれば美味しい）→島全体を食べる
   - 一流シェフを活用するというより、「ばあちゃんの知恵」（身近で懐かしい味）を活かす
   - 生業の多様性と人材の多様性が重要であるが、今は持続可能性がない
     （もともと、百姓の語源は百の生業からきているのだが）
   - 浦戸は東京から公共交通機関だけで行ける一番近い離島という点からもアピールできる

- 浦戸アイランドクラブの若者（加藤氏）は浦戸出身の祖父がおり、生涯浦戸で過ごす気概で来ている
  - そのような若者をもっと増やせればよい
- 桂島：居住区→非居住区になった区域を今後どう活用するのか、アイデアが必要
- 語り部の発掘

2. **被災地田んぼの復興、今とこれから（岩渕）**

- 水田の水確保
  - 工事によって、水はけがよくなると水が抜けてしまう
- 除塩の実施状況
  - 気仙沼の被災水田における昨年の収量は、例年の 1.5 倍となった
  - 寒風沢島、元屋敷浜の土壌塩分濃度は順調に減少
  - 南三陸の入谷はすぐ田植えできる状態まで作業完了
- 元屋敷浜における土木工事の実施　→　乾田化
  - 入れ替え工事で窒素分が上がらないような土を使っている
  - メソポタミア湿原の復元（堤防の復元）を目指していたが、全て崩された
  - 人工的に堤防を作ることで景観も損ねている
  - 溜池を作っていたが、小さい。水はどこから確保するのか？水道水？船で持ってくる？無料のものにお金がかかる
- 石巻市渡波における活動
  - 水田の殆どは宅地化される予定のため土地代が上がっており、田植えをしないでほしいと言われている
    （実施者の阿部氏は土地持ちではなく借地）
  - 米の販売はせず、田んぼアートをやる方向性で検討
- グリーンルネッサンス研究所
  - 田尻の元村役場をそのまま使う（建物代は無料、土地所有者は大崎市）
- ふゆみずたんぼと乾田の土中放射線量の比較
  - ふゆみずたんぼの方が低くなっている
- ひとつぶのたねプロジェクト
  - 被災地は育苗施設も破壊されており、田尻で種から苗に育てた苗を被災地のふゆみずたんぼに送る
- ふゆみずたんぼの特徴
  - ローテクで雑草を抑制
  - 畔の草刈りで花を咲かせる
- ふゆみずたんぼ国際フォーラム企画
  - 小金井市はふゆみずたんぼを実施している
  - リオ＋２０での発表：環境未来都市は出ているが「環境未来農村」は出ていない
  - 1/26 に筑波大学でフィリピンの棚田について来日講演がある

3. **蕪栗沼・ふゆみずたんぼプロジェクト（緑の分権改革：総務省予算）（大和田）**

- 緑の分権改革：分散自立、地産地消、低炭素型の地域主権社会を目指す

- 「ふゆみずたんぼプロジェクト」は「被災地復興モデル調査事業」として継続
- 葦を使ったペレット化（ぬまっこクラブ）
  - 乾燥しているので効率的にできる
  - 大崎市では再生可能エネルギー推進室を作って、再エネ事業にも力を入れている
- 水田復興プロジェクトふゆみずたんぼの蕪栗沼周辺水田
  - 宮城・仙台圏の女性を中心としたふゆみずたんぼ広め隊
- Web サイト、世界一田めになる学校（東京大学）、マルシェ、ツアー実証等を実施
  - ロイヤルパークホテルのシェフを活用（地元の女性にとっては付加価値）
  - 逆に地元の人が良さを気付かされている場合も
- 三次補正で予算獲得
  - 浦戸諸島、入谷等も含めた「ふゆみずたんぼネットワーク」を検討
- コンセプトは、「生物多様性」、「環境共生農・漁業」、「人と人、人と自然の絆」

4. 気仙沼からの報告（千葉）

- 明戸地区の状況
  - もともと海抜が低い地域で、高校は４階まで浸水、地域全体にしばらく水が抜けなかった
  - 松が全て更地になったため、雨や雪が降ると海が濁り漁業に影響する
  - 明治 29 年に高台移転を行い、移転地の住宅は守られた
  - がれきだらけでも、鮭は上る
  - モミを木材にしていた歴史があり、立派なモミが多い
- 大谷地区の状況
  - 明治 29 年代の高台移転は、こちらでも効果があった
  - 沿岸はニセアカシアの林だった
  - ふゆみずたんぼを始めたところ、白鳥が来訪
  - ふゆみずたんぼを行っていた水田が、震災後に水はけが良くなってしまった
- 土止めに問題があるのではないか
  - 別の方法を検討すべき
- 文化、歴史上のツバキについて
  - ツバキ油の精製をしていた（気仙沼市では専門に絞めていた業者もいた）
  - ツバキ、タブは潮に強いため、沿岸に多い
  - 一方で、土壌がちゃんとできていないとすぐダメになる
  - 伊豆大島はツバキを売りにしているが、同様にできるか
    （⇔精製方法が異なる：伊豆大島では生で絞っている一方、気仙沼では一度蒸してから絞っている）

5. 三陸地域の自然公園等を活用した復興の考え方（鳥居）

- 三陸復興国立公園の創設について
  - ５年に一回は、名称も含めて見直しを行う（「復興」を名称に付け続けるのか、など）
  - 復興公園は震災の記憶を留めさせることも一つの目的だろう
- 里山・里海フィールドミュージアム

- 復興エコツーリズム
  - 地元事業者が主体的に実施
- 東北海岸トレイル
  - 青森県蕪島と福島県松川浦を結ぶトレイルで、既存の遊歩道を活用する
  - ガイドによるツアーや体験談学習などソフト面での整備も必要
- 森・里・川・海のつながりの再生
- ESD の推進
- 地震・津波による自然環境への影響の把握
- 対立構図が生じている、という見方もある
  - 自然との共生をしている人の生活を崩してはいけない
  - むしろ、その生活から学びを得ていくべき
- 生態系サービスの向上を目指す旨を明示できればよいのでは

6. **東北うみたんグリーン復興プロジェクト（川廷）**

- 浦戸諸島
  - 報道：寒風沢島、元屋敷浜の事実で、例えば NHK が密着取材したらどう報道されるか
  - 伝承：フィールドミュージアムの題材掘り起こし（聞き書きなど）
  - 仕掛：シーカヤックなどキーアクションの監修
  - 農地の改修における地元の人の声はどうか
- 報道は止めた方がいいだろう
  - 地元の人も自問自答している状況である
  - 報道が入ると、地元の人の決断に影響してしまうだろう
  - 外部主導になり島民地震の疎外感を生む危険性
  - 一方で、巨大堤防開発は各地で問題になっており、隣接地では堤防の建設中止もされたので、その件で取材は入る可能性はあるだろう
- 「生物多様性の主流化」に向けたコミュニケーションの強化（生物多様性国家戦略のあり方）
  - 誰に読ませたいか、を明確にするべき
  - 資料本で終わらせてはいけない
  - 繋がり（流域の連続性）が伝わるような表現が重要
  - 知識だけでなく体験も伴わせる必要がある
  - グリーン復興のキーワードを入れ込む
- 広告会社の CSR
  - 「ココロザシ」の可視化を会社へ提案予定

7. **SATOYAMA イニシアティブ（鈴木、蓑原、久米）**

- 国連大学の SATOYAMA イニシアティブの事務局として参加
- SATOYAMA イニシアティブ
  - 世界各地で連携し、多様な団体が参加している多種多様な活動の場
  - IPSI で震災復興を実施
- インクカートリッジ里帰りプロジェクト

- プリンター競合６社で実施しており、ユーザーへの訴求を目指している
- 環境教育も考えており、子どもや学生を巻き込んでいきたい

8. **海と田んぼからのグリーン復興　RIO+20 と CBD SBSTTA/COP11 への発信（服部）**

- 「持続可能な日本文明」の発信を目指す
- 環境科学研究科の成果：「90 歳が変える未来のテクノロジー」
  - DESIS JAPAN にて実施
- リオ+20
  - 「The future we want」が標語
  - 政治文章の作成、今後の在り方の議論の２本柱で実施
  - 6/13 から準備委員会、6/13 からブラジルのイベント、6/20 から本会合
  - グリーン・エコノミーへの日本からの提案は震災復興での「環境未来都市」の発信
    ⇒東北大学からは「環境未来農村」を提案
  - NGO はレーシング上でブース出展可能
  - 国連 SD ラーニングで２枠申し込み（グリーン・エコノミーと指標が一つ、もうひとつでうみたんを紹介できる可能性）
  - People サミットは 4/20 締め切りで、こちらでの出展も検討可能？
  - 発信方法としては、オフィシャルの間口に対して発信可能
- 生物多様性条約系
  - IUCN-J にじゅうまるで WGRI
  - UNDB 市民ネットワークで持続可能な生産と消費、資金動員戦略（モントリオールで発信）
- 指標研究として、時間を測ることでサステナビリティを評価
  - 自然と人間の関わりあいの時間を取り戻す

9. **その他**

- 次回の開催は 7/21（土）、午前中から開催（詳細は別途）

以上